Tulips University of Tsukuba Repository

# 〈資料〉民法成立史一斑（九）：筑波大学附属図書館蔵「穂積文書」採録



| | |
|---|---|
| 著者 | 阿部 徹 |
| 雑誌名 | 筑波法政 |
| 巻 | 23 |
| ページ | 327-349 |
| 発行年 | 1997-09 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00155902 |

〈資料〉

# 民法成立史一斑（九）

## ――筑波大学附属図書館蔵「穂積文書」採録――

阿部　徹

### 第一部　旧民法関係資料

#### 四　債権担保編関係（承前）

#### 二六　民法草案債権担保編（承前）

第五章　抵当

第一節　抵当ノ性質及ヒ目的物

第二百一条～第二百二条　〔略。成案一九五条～一九六条と同一〕

第二百三条　抵当ハ不動産ノ完全所有権ノ上ノミナラス父母ノ法律上ノ用益権ヲ除クノ外ノ用益権、賃借権、永借権及ヒ地上権ノ上ニモ此等ノ権利ヲ支分シタル所有権ノ上ニモ之ヲ設定スルコトヲ得

然レトモ完全ノ所有権ヲ有スル者ハ虚有権又ハ用益権ノミヲ分離シテ之ヲ抵当ト為スコトヲ得ス

之ニ反シテ所有者ハ其不動産ノ限界ニ因リテ定マリタル部分又ハ其不分ノ幾部分ヲ抵当ト為スコトヲ得

地役ハ要役地ヨリ分離シテ之ヲ抵当ト為スコトヲ得ス又用方ニ因ル不動産ハ其附着スル不動産ヨリ分離シテ之ヲ抵当ト為スコトヲ得ス

第二百四条　左ニ掲クルモノハ之ヲ抵当ト為スコトヲ得ス

使用権、住居権其他譲渡スコトヲ得ス又ハ差押フルコトヲ得サル財産

財産編第十条第二号及ヒ第三号ニ掲ケタル如キ不動産債権

同条第四号ニ掲ケタル如キ不動産ト為シタル債権但之ヲ不動産ト為スコトヲ許可スル法律カ其抵当ヲ許ササルトキニ限ル

船舶ノ抵当ニ付テハ商法ノ規定ニ従フ

第二百五条　〔略。成案一九九条と同一〕

第二百六条　抵当ハ漸積地ノ如キ意外及ヒ無償ノ原因ニ由リ或ハ築造、栽植其他ノ工作ノ如キ債務者ノ所為及ヒ費用ニ因リテ不動産ニ生スルコト有ル可キ増加又ハ改良ニ当然及フモノトス但他ノ債権者ニ対シテ詐害ナキコトヲ要シ且前章ニ規定シタル如キ工匠、技師及ヒ工事請負人ノ先取特権ヲ妨ケス

抵当ハ債務者カ縦令無償ニテ取得シタルモノナルモ其隣接地ニ及ハサルモノトス但新囲障ノ設立又ハ旧囲障ノ廃棄ニ因リテ隣接地ヲ抵当不動産ニ合体シタルトキモ亦同シ

第二百七条　意外若クハ不可抗ノ原因又ハ第三者ノ所為ニ出テタル抵当財産ノ滅失、減少又ハ毀損ハ債権者ノ損失タリ但先取特権ニ関シ第百三十七条ニ記載シタル如ク債権者ノ賠償ヲ受ク可キ場合ニ於テハ其権利ヲ妨ケス

若シ抵当財産カ債務者ノ所為ニ因リ又ハ保持ヲ為ササルニ因リテ減少又ハ毀損ヲ受ケ此カ為メ債権者ノ担保カ不十分ト為リタルトキハ債務者ハ抵当ノ補充ヲ与フルノ責ニ任ス此補充ヲ与フルコト能ハサル場合ニ於テハ債務者ハ担保ノ不十分ト為リタル限度ニ応シ満期前ト雖モ債務ヲ弁済スルノ責ニ任ス

第二百八条　抵当財産ノ差押ナキ間ハ債務者ハ財産編第百十九条及ヒ第百二十条ニ定メタル期間中其不動産ヲ賃貸スルコトヲ得又其果実及ヒ産出物ヲ譲渡シ及ヒ管理ノ総テノ行為ヲ為スコトヲ得



第二節　抵当ノ種類

第二百九条　〔略。成案二〇三条と同一〕

第一款　法律上ノ抵当

第二百十条　左ノ抵当ハ総テノ要約ニ関セス当然成立ス

第一　婦カ其夫ニ対シテ有スルコト有ル可キ総債権ノ為メ婚姻ノ日現ニ夫ニ属スルト後日之ニ属ス可キトヲ問ハス其夫ノ総不動産ニ付キ婦ノ有スル抵当但夫ノ未成年タルトキモ亦同シ

第二　未成年者及ヒ禁治産者カ其後見人ニ対シテ有スル総債権ノ為メ現在ニ属スルト将来ニ得ルトヲ問ハス後見人ノ総不動産ニ付キ有スル抵当

第三　国、府、県、市、町、村及ヒ公設所カ行政法ノ定メタル限度ト条件トニ従ヒ会計吏員ノ管理ノ為メ其不動産ニ付キ有スル抵当

又第百八十六条及ヒ第百八十九条ニ従ヒテ変性シタル先取特権ヨリ生スル抵当ハ之ヲ法律上ノ抵当ト看做ス

第二款　合意上ノ抵当

第二百十一条　合意上ノ抵当ハ公正証書又ハ私署証書ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ設クルコトヲ得ス

代理人ヲ以テ抵当ヲ設定スルトキハ委任ノ要旨ヲ抵当ノ合意中ニ示スコトヲ要ス

第二百十二条　本邦ニ存在スル財産ニ付キ外国ニ於テ為シタル抵当ノ合意ハ此種類ノ行為ノ為メ外国ニ於テ用ユル方式ニ従ヒ之ヲ為シタルトキハ其効ヲ生スルコトヲ得然レトモ第二百十九条及ヒ第二百二十五条以下ニ規定シタル条件ニ従フニ非サレハ此合意ニ依リ本邦ニ於テ記入ヲ為スコトヲ得ス

第二百十三条　抵当設定ノ証書ニハ義務ノ担保ニ充テタル不動産ヲ其性質及ヒ所在ヲ以テ特ニ指示スルコトヲ要ス

若シ抵当ノ設定カ債務者ノ現在ノ各不動産ヲ特ニ指示セスシテ其全部又ハ一分ヲ包含スルトキハ債務者ノ請求ニ因リ債権ノ担保ニ必要ナルモノニ其抵当ヲ減少スルコトヲ得

債務者ノ将来ノ財産ニ付テノ一般又ハ特別ノ抵当ノ設定ハ無効タリ

第二百十四条　抵当ノ設定証書ニハ右ノ外義務ノ原因、体様及ヒ其主従ノ目的ヲ明カニ指示スルコトヲ要ス

義務ノ目的カ金銭タラサルトキハ之ヲ評価ス可シ然レトモ其評価ハ第二百二十六条ニ記載スル如ク記入ニ於テモ尚ホ之ヲ為スコトヲ得

第二百十五条　抵当ハ抵当ニ充テント欲スル物ノ所有権又ハ収益権ヲ有シ且有償又ハ無償ニテ其物ヲ処分スルノ能力ヲ有スル者ニ非サレハ之ヲ承諾スルコトヲ得ス但第三者ノ抵当設定ニ関スル第二百十七条ノ規定ヲ妨ケス

若シ有期ノ権利ヲ抵当ト為シタルトキハ其抵当ハ右ノ権利ノ時期外ニ効力ヲ生スルコトヲ得ス然レトモ抵当ト為リタル権利カ此時期ノ満了前或ル出来事ニ因リ物ノ価額ヲ代表スル償金ニ移リタルトキハ債権者此償金ニ付キ其権利ヲ行フ

第二百十六条　〔略。成案二一〇条と同一〕

第二百十七条　合意上ノ抵当ハ第百二条及ヒ第百二十一条ニ於テ動産質及ヒ不動産質ニ付キ記載シタル如ク債務者ノ債務ヲ担保スル為メ第三者ヨリ之ヲ与フルコトヲ得

右ノ抵当ハ常ニ債務者ニ対シテハ恩恵ナリトス

又抵当ハ債権カ無償ナルトキ又ハ有償ナルモ諾約ナクシテ主タル合意以後ニ之ヲ設定シタルトキハ債権者ニ対シテモ恩恵ナリトス

### 第三款　遺言上ノ抵当

第二百十八条　抵当ハ遺贈ノ全部若クハ一分ノ担保ノ為メニ非サレハ遺言ヲ以テ之ヲ与フルコトヲ得ス

### 第三節　抵当ノ公示

#### 第一款　記入ノ条件、方式及ヒ期間

第二百十九条　凡ソ法律上、合意上又ハ遺言上ノ抵当ハ下ニ定メタル条件及ヒ方式ニ従ヒ其不動産所在地ノ登記所ニ於テ記入ヲ為シタルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ対抗スルコトヲ得ス

数箇ノ登記所ノ管轄ニ跨カル不動産ノ全部ヲ抵当ト為シタルトキハ其主タル部分ノ所在地ヲ管轄スル登記所ニ於テ記入ヲ為シ他ノ登記所ニ於テハ其記入及ヒ日附ノ記載ノミヲ為ス

第二百二十条　抵当ハ左ノ二箇ノ場合ニ於テハ有効ニ之ヲ記入スルコトヲ得ス

第一　抵当設定ノ後債務者ノ無資力カ正当ニ宣告セラレ又ハ其財産ノ全部若クハ過半ノ差押ニ因リ顕然ト為リタルトキ但破産ノ場合ニ於ケル記入ノ権利ニ付テノ商法ノ制限ヲ妨ケス

第二　債務者カ死亡シテ法律ニ因リ相続ヲ受ク可キ総テノ相続人カ単純ニ其相続ヲ受諾セサルトキ

抵当財産ノ譲渡アリタルトキ其譲受人ニ対シテ債権者ノ記入スル権利ノ制限ハ第五節ニ於テ之ヲ規定ス

第二百二十一条　債権者カ財産ノ管理権ヲ有セサルトキハ抵当ノ記入ハ法律上又ハ裁判上ノ代人之ヲ為ス

抵当ノ記入ハ総理代人及ヒ法律上又ハ合意上ノ抵当ノ附着シタル行為ヲ為スノ委任ヲ受ケタル部理代人ノ権利及ヒ義務ニ属ス

又記入ハ債権者ノ委任ナクシテ事務管理人之ヲ為スコトヲ得

第二百二十二条　婦ノ法律上ノ抵当ハ夫カ婦ニ対シ契約其他ノ方法ニテ条件附ナルト否トヲ問ハス債務者ト為リタル時ヨリ夫又ハ裁判所ノ許可ヲ要セス婦ノ請求ニ因リテ之ヲ記入スルコトヲ得又其記入ハ婦ノ適当ト思考スル不動産ノ全部又ハ一分ニ付キ之ヲ為スコトヲ得但第二百四十条ニ記載スル如ク夫ノ有スル抵当減少ノ権利ヲ妨ケス

婦カ記入ヲ為ササルトキハ夫ハ婦ノ担保ノ為メ十分ナル不動産ニ付キ其記入ヲ為スコトヲ要ス

婦又ハ夫カ記入ヲ為ササルトキハ縦令委任ナキモ婦ノ親属又ハ姻属ニテ之ヲ為スコトヲ得但婦ノ故障又ハ抛棄ナキコトヲ要ス

第二百二十三条　未成年者ノ法律上ノ抵当ハ夫カ婦ノ法律上ノ抵当ヲ記入スルト同一ノ場合ニ於テ同一ノ条件ニ従ヒ後見人之ヲ記入スルコトヲ要ス

後見人記入ヲ為ササルトキハ後見監督人又ハ親属会議員其記入ヲ為スコトヲ要ス若シ之ヲ為ササルトキハ未成年者ニ対シ連帯シテ損害賠償ヲ負担ス

未成年者モ亦後見ヲ脱シタル後ハ其記入ヲ求ムルコトヲ得

第二百二十四条　前条第一項及ヒ第二項ノ規定ハ禁治産者ノ法律上ノ抵当ニ之ヲ適用ス

処刑言渡ニ因レル禁治産ノ場合ニ於テハ禁治産者ノ特別ノ代理人ニテモ記入ヲ求ムルコトヲ得

第二百二十五条　抵当ノ記入ヲ求ムル者ハ下ニ記スル如ク己

レノ利益ノ為メ又ハ己レノ代表スル債権者ノ利益ノ為メ抵当ノ成立ヲ登記官吏ニ疎明スルコトヲ要ス

婦、未成年者又ハ禁治産者ノ法律上ノ抵当ニ関スルトキハ抵当ノ原因タル婚姻又ハ後見ノ証拠ニ依リテ其疎明ヲ為スコトヲ要ス

合意上ノ抵当ニ関スルトキハ抵当ヲ設定シタル証書ノ正本ニ依リテ其疎明ヲ為スコトヲ要ス

遺言上ノ抵当ニ関スルトキハ遺言書ノ正本又ハ其公正ナル写書ニ依リテ其疎明ヲ為スコトヲ要ス

総テノ場合ニ於テ登記官吏カ抵当成立ノ証拠ヲ不十分ナリトスルトキ又ハ債務者ト帳簿ニ記載アル不動産所有者ト同人ナルコトノ十分ナル疎明ナキトキハ登記官吏ハ自己ノ責任ニテ記入ヲ拒絶スルコトヲ得但第三百七条ニ記載スル如ク裁判ヲ受クル為メ同条ノ規定ニ従フコトヲ要ス

第二百二十六条　記入ノ要求者ハ右ノ外左ノ諸件ヲ精確ニ指示スル明細書ノ正本二通ヲ差出タスモノトス

第一　債権者ノ氏名、職業及ヒ住所若クハ居所

第二　債務者ノ氏名及ヒ成ル可ク職業、住所若クハ居所

第三　抵当ノ原因及ヒ法律上ノ抵当外ノ抵当ニ関スルトキハ設定証書ノ性質及ヒ日附

第四　債権ノ性質、其証書ノ日附、之ニ記載シタル金額又ハ其価額ノ不確定ナルトキハ現ニ評価シタル金額及ヒ債務ノ要求期限

第五　抵当ト為シタル不動産ノ性質及ヒ其所在地

従来ノ記入ノ縁辺ニ附記ス可キ譲渡又ハ代位ノ場合ニ於テハ明細書ニ新債権者及ヒ其証書ノ指示ヲ記載スルヲ以テ足レリトス

第二百二十七条　婦、未成年者又ハ禁治産者ノ法律上ノ抵当ニ因リテ担保セラレタル債権カ不当ノ利得又ハ不正ノ損害等ノ事実ヨリ生セシトキハ要求者ノ申立テタル事実ノ要旨及ヒ其主張シタル債権ノ評価ヲ明細書ニ指示ス可シ

第二百二十八条　登記官吏ハ上ニ指定シタル書類ヲ受取リタルトキハ要求者ニ受取証ヲ付与ス但其受取証ニハ第二百五十三条ノ適用ヲ保スル為メ受取ノ日附ト共ニ其日ノ受取番号ヲ記載ス可シ

第二百二十九条　債権者ノ相続人又ハ譲受人ハ原債権者ノミノ名ヲ以テ或ハ自己ト原債権者トノ連名ヲ以テ記入ヲ求ムルコトヲ得

債権者ノ代理人又ハ事務管理人ヨリ記入ヲ求ムルトキハ其名及ヒ分限ヲ本人ノ名及ヒ分限ト共ニ記載ス可シ

第二百三十条　債務者カ死亡シタルトキハ記入ハ債権者ノ選択ニ因リテ其債務者ニ対シ又ハ其総テノ相続人ニ対シテ之ヲ為スコトヲ得

抵当ノ負担アル不動産カ相続ノ分割ニ因リテ一人ノ相続人

ニ帰シタル場合ニ於テハ其一人ノミニ対シテ記入ヲ為スコトヲ得

第三者ノ設定シタル抵当ニ関シテハ設定者ニ対シテ記入ヲ為スモノトス

第二百三十一条　登記官吏カ記入簿ニ明細書ノ箇条ヲ記載シタルトキハ其二通ノ明細書ノ各葉ニ同一ノ割印ヲ押捺シ其一通ハ抵当ノ疎明書ト共ニ之ヲ要求者ニ還付シ他ノ一通ハ登記官吏之ヲ保存ス

此他ノ細則ハ別ニ之ヲ定ム

第二百三十二条　明細書ノ箇条ノ脱漏不足又ハ訛誤ニ因リテ不完全ナル記入ノ為メ第三者カ抵当ノ或ル要点ヲ知リ得サリシヨリ生シタル損害ヲ証スルトキハ其請求ニ因リテ記入ノ無効ヲ宣告スルコトヲ得

第二百三十三条　法律上、合意上又ハ遺言上ノ抵当ノ記入ハ三十个年間其効力ヲ有ス三十个年後ハ債権ノ時効カ中断又ハ停止ニ係リタルトキト雖モ其記入ノ効力ヲ失フ

右抵当ノ時効ハ無能力者ニ対シテ停止セス但其代人ニ対スル求償ヲ妨ケス

然レトモ三十个年ノ期間満了前ニ記入ヲ更新シ旧記入ノ日附ヲ精確ニ記載シタルトキハ抵当ノ順位ハ旧記入ト同一ノ日附ニテ存ス

記入ノ効力ヲ失ヒシ後ノ更新ハ新記入ニ同シク其更新ノ日附ニ於テノミ効力ヲ生ス



第二百三十四条　三十个年ノ期間内ニ於ケル記入ノ更新ハ旧記入後ニ起リタル債務者ノ破産、無資力又ハ死亡ニ拘ハラス之ヲ為スコトヲ得

第二百三十五条　登記官吏ハ更新ノ要求書ノ正本二通ヲ受取リタル上ニテ記入ノ更新ヲ為シ其一通ニハ割印ヲ捺シテ之ヲ要求者ニ還付ス

第二百三十六条　記入ノ費用ハ債権ヲ有償名義ニテ取得シタルトキハ債務者及ヒ債権者各其半額ヲ負担ス

更新ノ費用ハ債権者ノミ之ヲ負担ス

第二百三十七条　記入ニ関スル争ハ抵当財産所在地ノ裁判所ニ之ヲ訴フ可シ

第二款　記入ノ抹殺、減少及ヒ正誤

第二百三十八条　記入ノ抹殺ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ為ス

第一　債権カ無効タリ若クハ銷除ス可キモノタルトキ又ハ其全部ノ消滅シタルトキ

第二　抵当カ有効ニ設定セラレス若クハ法律ニ従ヒテ成立セサルトキ

第三　記入カ第二百三十二条ニ依リテ銷除ス可キモノナルトキ

右ハ第二百四十四条ニ記載シタル如ク或ル不動産ニ付テノ記入ヲ抹殺スルコトヲ妨ケス

第二百三十九条　記入ノ抹殺ハ債務者又ハ其承継人ノ請求ニ因リテ之ヲ宣告スルコトヲ要ス但下ニ規定シタル方式ニ於テ債権者ヨリ之ヲ許シタルトキハ此限ニ在ラス

第二百四十条　婦ノ法律上ノ抵当カ其債権ノ担保ニ必要ナルヨリ多キ不動産ニ付キ記入アリ又ハ其債権ノ正当ナル評価ヨリ更ニ多キ金額ノ為メニ記入アリタルトキハ夫又ハ其承継人ハ不動産又ハ金額ニ関シ裁判上ニテ此記入ノ減少ヲ請求スルコトヲ得但抵当ヲ或ル不動産ニ制限セス又ハ婚姻契約若クハ配偶者間ノ特別合意ニ因リテ債権額ヲ評価セサルトキニ限ル

第二百四十一条　右ニ同シク後見人又ハ其承継人ハ未成年者又ハ禁治産者ノ担保ニ必要ナルモノノ外ニ為シタル記入ノ減少ヲ請求スルコトヲ得但親属会議ノ決議ニ因リテ抵当ヲ或ル不動産ニ制限セス又ハ債権額ヲ評価セサルトキニ限ル

第二百四十二条　合意上ノ抵当ハ債務者ノ現在ノ総財産ニ関シ第二百十三条ニ記載シタル如ク過度ナルトキニ非サレハ債務者其減少ヲ請求スルコトヲ得ス

債務者ハ常ニ債権者ノ記入シタル債権ノ評価ノ減少ヲ請求スルコトヲ得但設定証書又ハ別証書ヲ以テ評価ヲ為ササルトキニ限ル

第二百四十三条　〔略。成案二二九条と同一〕

第二百四十四条　債務カ半額以上消滅シタルトキハ債権者ハ債務者ノ要求ニ因リ三種ノ抵当ニ付キ金額ノミノ記入ヲ減少ス可シ

債務者ハ一分ノ弁済ヲ為シタルトキハ常ニ自費ニテ記入ノ縁辺ニ之ヲ附記スルコトヲ得

第二百四十五条　債務者ノ請求ヲ正当トスル判決ニハ抵当ヲ免カレタル不動産又ハ評価ヲ改メタル金額ヲ指示ス

右第一ノ場合ニ於テハ抵当ノ記入ヲ抹殺シ第二ノ場合ニ於テハ之ヲ減少ス

第二百四十六条　前数条ニ従ヒ記入ヲ或ル不動産ニ減少シタル場合ニ於テ其不動産カ債権者ノ担保ニ不十分ト為リタルトキハ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因ルト雖モ債権者ハ抵当ノ補充ヲ請求スルコトヲ得

第二百四十七条　記入ノ抹殺又ハ減少ハ確定判決ニ依ルニ非サレハ之ヲ為スコトヲ得又証書ヲ以テスルニ非サレハ債権者之ヲ承諾スルコトヲ得ス

第二百四十八条　任意ノ抹殺又ハ減少カ債務ノ消滅ニ基クトキハ其抹殺又ハ減少ヲ承諾スルニハ債権者其債務ノ弁済ヲ受ケ又ハ之ヲ追認スルノ能力ヲ有スルヲ以テ足レリトス

抹殺カ右ノ外第二百三十八条ニ記載シタル原因ノ一ニ基クトキハ債権者和解スルノ能力ヲ有スルコトヲ要ス

又抹殺又ハ減少カ抵当ヲ無償ニテ抛棄スルノ性質ヲ有スルトキハ債権者無償ニテ債権ヲ処分スルノ能力ヲ有スルコト

ヲ要ス

第二百四十九条　記入ノ抹殺又ハ減少ヲ承諾スル為メノ委任ハ証書ヲ以テ之ヲ与フルコトヲ要ス

然レトモ抹殺又ハ減少カ債務ノ消滅ニ基クトキハ債務者ノ免責ヲ承諾スルノ権限ヲ有シタル代理人ニ於テ其抹殺又ハ減少ヲ承諾スルコトヲ得

和解又ハ無償ノ抛棄ニ付テハ委任ハ明示タルコトヲ要ス

第二百五十条　抹殺又ハ減少ヲ為スニハ其合意又ハ判決ヲ記入ノ縁辺ニ附記スルコトヲ要ス

登記官吏ハ証書ノ正本又ハ判決書ノ公正ナル謄本ヲ受取リタル上ニ非サレハ右ノ附記ヲ為スコトヲ得ス但判決書ノ謄本ヲ差出ス場合ニ於テハ其判決ノ確定ト為リタル旨ヲ裁判所書記ノ証記シタルコトヲ要ス

第二百二十五条末項及ヒ第三百七条ハ登記官吏ノ拒絶及ヒ其責任ニ之ヲ適用ス

第二百五十一条　抹殺若クハ減少ヲ後日ノ判決又ハ債務者トノ合意ニテ銷除若クハ解除シタルトキハ其判決又ハ合意ヲ更ニ記入シ又ハ前記入ノ縁辺ニ附記ス此場合ニ於テハ前記入ハ前債権者ノ為メ其効力ヲ回復ス然レトモ抹殺若クハ減少ノ後ニ於テ不動産ニ付キ権利ヲ取得シ抵当ノ復旧ノ公示前ニ其権利ヲ記入シタル第三者ニハ此記入ヲ以テ対抗スルコトヲ得ス



第二百五十二条　記入、更新、抹殺又ハ減少ニ訛誤又ハ脱漏アルモ此カ為メ銷除ヲ為スニ足ラサルトキハ当事者ノ協議又ハ判決ヲ以テ正誤ヲ為ス

第四節　債権者間ノ抵当ノ効力及ヒ順位

第二百五十三条　凡ソ不動産ニ付キ記入シタル抵当債権者ハ無特権債権者ニ先タチ其不動産ノ代価ノ配当ニ有益ニ加入スルコトヲ得

法律上、合意上又ハ遺言上ノ抵当ヲ有スル数人ノ債権者間ニ於テハ其配当加入ノ順位ハ数箇ノ記入ヲ同日ニ為シタルトキト雖モ其記入ノ前後ニ因リテ之ヲ定ム但登記官吏ノ第二百二十八条ノ規定ヲ遵守セサル場合ニ於テハ之ニ対スル責任ノ訴権ヲ妨ケス

第二百五十四条　記入ハ掲載シタル利息及ヒ定期ノ附従物ニ其経過シタル最後ノ二个年分ニ限リ主タル債権ト同一ノ順位ヲ得セシム但二个年以外ノ利息及ヒ附従物ノ為メ債権者ノ日後記入ヲ為スノ権利ヲ妨ケス然レトモ此記入ハ其日附ニ於テノミ効力ヲ生スルモノトス

第二百五十五条　抵当ノ順位ハ債権カ条件附ナルトキ又ハ信用ヲ開キテ為ス貸付ノ如ク漸次ノ支払ヨリ生スルトキト雖モ亦記入ニ因リテ之ヲ定ム

第二百五十六条　債権者カ数箇ノ不動産ニ付キ抵当ヲ有シ其各箇ノ代価カ同時ニ清算アリシトキハ其債権ハ総不動産ノ

価額ノ割合ニ応シテ之ヲ分配ス可シ
漸次ノ清算ノ場合ニ於テ右ノ債権者カ不動産中ノ一箇ノ代価ニ因リテ全ク弁済ヲ受ケ此一箇ノ不動産ニ付キ其債権者ノ次ニ抵当ヲ有スル一人又ハ数人ノ債権者ノ為メニ損失ノ生スルトキハ其一人又ハ数人ノ債権者ハ他ノ各不動産ニ付テハ其己レニ先タチタル債権ニ於ケル其各不動産ノ分担部分ニ限リ自己ノ債権ノ為メ其相互ノ順位ヲ以テ右弁済ヲ受ケタル債権者ノ抵当ニ当然代位ス

第二百五十七条　前条ノ代位ハ原債権者ニ次テ右各不動産ニ付キ記入ヲ為シタル債権者ニ対シテ其効ヲ生ス
右ノ代位者カ記入ノ縁辺ニ其代位ヲ附記シタルトキハ其代位者ヲ順序配当手続中ニ加ハラシムルコトヲ要シ且其承諾アルニ非サレハ何等ノ抹殺又ハ減少ヲモ為スコトヲ得ス
若シ右ノ不動産ニ付キ原債権者ノ抵当ノ記入ナキトキハ代位者其記入ヲ為シ且右ト同一ノ目的ニテ其縁辺附記ヲ為スコトヲ得

第二百五十八条　凡ソ債権ヲ処分スルノ能力アル抵当債権者ハ同一債務者ノ他ノ債権者ノ利益ニ於テ自己ノ抵当又ハ其順位ノミヲ抛棄スルコトヲ得但財産編第五百条及ヒ第五百三条ニ於テ更改ニ関シ規定シタルモノヲ妨ケス
若シ抵当債権ヲ数次ニ数人ニ対シ譲渡、抛棄又ハ代位ノ目的ト為セシトキハ優先権ハ承権(ママ)人中記入ノ縁辺ニ自己ノ権利ノ設定証書ヲ附記シ又ハ記入ノ有ラサリシトキハ之ヲ為シテ其取得ヲ第一ニ公示シタル者ニ属ス

第二百五十九条　右ノ外第百九十条ノ規定ハ前二条ノ場合ニ之ヲ適用ス

第二百六十条　抵当債権者又ハ無特権債権者ハ記入ナキ抵当ヲ知リテ之ヲ自認シタリト雖モ記入ノ欠缺ヲ利唱スルノ権利ヲ失ハス

第二百六十一条　不動産ノ売却代価ヲ以テ全部ノ弁済ヲ受ケサル抵当債権者ハ其残額ニ付テハ無特権債権者タリ
若シ不動産ノ売却ニ先タチテ動産有価物ノ配当ヲ為ストキハ抵当債権者ハ其債権全額ノ為メ無特権債権者トシテ仮ニ其配当ニ加入ス
其後ニ至リ抵当不動産ノ代価ノ配当アルトキハ抵当債権者ハ動産有価物ニ付キ何等ノ弁済ヲモ受ケサリシカ如ク其配当ニ加入ス然レトモ此配当ニ於テ全ク弁済ヲ受ク可キ者ハ動産ノ配当ニテ受取リタル金額ヲ扣除スルニ非サレハ其抵当ノ配当額ヲ受取ルコトヲ得ス其扣除シタル金額ハ動産財団中ニ之ヲ返還ス
不動産ノ代価ノ配当ニ於テ一分ノミノ弁済ヲ受クルコトヲ得ヘキ者ニ付テハ配当ニ加ハルコトヲ得サリシ残額ニ従ヒ其動産財団ニ対スル権利ヲ定ム但此割合外ニ受取リタルモノハ其抵当ノ配当額中ヨリ扣除シ之ヲ動産財団中ニ返還ス

右ノ返還金額ハ純粋ノ無特権債権者ト有益ニ配当ニ加入スルヲ得サルカ又ハ債権ノ一分ノミニ付キ之ニ加入シタル抵当債権者トノ間ニ於テ更ニ之ヲ配当ス

第五節　第三所持者ニ対スル抵当ノ効力

総則

第二百六十二条　抵当不動産カ譲渡サレ又ハ用益権其他ノ物権ヲ負担シタルトキハ其証書ノ登記前ニ記入ヲ為シタル抵当債権者ハ第三取得者ニ対シ債務ノ弁済ヲ請求スルノ権利ヲ保有シ又此不動産ノ売却代価ヲ以テ弁済ヲ受クル為メ其不動産ノ徴収ヲ訴追スルノ権利ヲ附従ニテ保有ス

然レトモ財産編第百十九条及ヒ第百二十条ニ規定シタル期間ヲ以テ為シ又ハ更新シタル賃貸借ハ抵当債権者之ヲ遵守スルコトヲ要ス

第二百六十三条　抵当カ所有権ノ支分ニ存シ債務者其権利ヲ抛棄シタルトキハ其抛棄ノ登記前ニ記入ヲ為シタル債権者ハ其抛棄ニ拘ハラス追及権ヲ保有ス

第二百六十四条　公正証書ヲ以テ設定シタル抵当ハ其不動産ヲ差押ヘ之ヲ売却セシメタル無特権債権者ニハ競落ノ登記前ニ其記入ヲ為シタルトキハ之ヲ以テ対抗スルコトヲ得但

第二百二十条ニ掲ケタル二箇ノ場合ニ於テ為セル記入ノ無効タルコトヲ妨ケス

第二百六十五条　第三所持者ノ破産、無資力又ハ死亡ハ其取得証書ノ登記アルマテハ抵当記入ノ妨碍ト為ラス



第二百六十六条　〔略。成案二五二条と同一〕

第一款　抵当債務ノ弁済

第二百六十七条　〔略。成案二五三条と同一〕

第二百六十八条　第三所持者ハ債務ノ全部又ハ一分ヲ弁済シタルトキハ財産編第四百八十二条第一号第四百八十三条第四号及ヒ第五号ニ従ヒ其弁済ヲ得タル債権者ニ属スル他ノ抵当、担保及ヒ利益ニ代位ス

又第三所持者ハ其弁済ヲ得サリシ債権者ヨリ所有権徴収ノ訴追ヲ受クルコト有ル可キ場合ノ為メ自己ノ所持セル不動産ノ負担スル抵当ニ付キ弁済ヲ得タル債権者ニ未定ニテ代位ス

第二款　滌除

第二百六十九条　第三所持者ハ記入シタル総テノ抵当債務ヲ弁済セサルモ債権者ニ其記入ノ順序ニ従ヒ不動産ノ取得代価、其評価若クハ之ニ超ユル金額ヲ弁済シ又ハ債権者ノ為メニ之ヲ供託シテ不動産ノ負担ヲ免カレシムルコトヲ得但下ニ規定セル如キ提供及ヒ滌除ノ手続ヲ為シタル後債権者ノ明示又ハ黙示ノ承諾アリタルコトヲ要ス

第二百七十条　停止条件附ニテ不動産ヲ取得シタル者ハ条件ノ成就ニ因リテ其権利ノ定マラサル間ハ滌除スルコトヲ得ス

解除条件附ニテ取得シタル者ハ条件ノ到来セサルニ因リテ其権利ノ定マル前ト雖モ滌除スルコトヲ得

此場合ニ於テ第三所持者ノ提供カ承諾ヲ得タルモ其金額ハ抵当債務ヲ全ク弁済スルニ足ラスシテ其抵当ヲ抹殺シタル後第三所持者ノ取得カ条件ノ到来ニ因リテ解除スルニ於テハ弁済ヲ得スシテ抹殺ヲ受ケタル抵当債権者ノ記入ハ第二百五十一条ニ従ヒテ之ヲ回復ス

又右ノ場合ニ於テ提供カ承諾ヲ得スシテ下ニ規定セル如ク不動産ヲ競売ニ付シタルトキハ競落ハ第三所持者ノ為メ宣告アリタルト其他ノ者ノ為メ宣告アリタルトヲ問ハス以後解除条件ヲ免カルルモノトス

第二百七十一条　抵当ヲ滌除スルノ権利ハ第三所持者ニシテ主タル債務者ト為リ又ハ保証人ト為リテ自身ニテ抵当債務ノ責ニ任スル者ニ属セス

右ノ権利ハ債務者ノ相続人ニシテ其債務ノ自己ノ部分ノミヲ弁済シタル者ニ属セス

又右ノ権利ハ他人ノ債務ノ為メ自己ノ財産ヲ抵当ト為シタル者又ハ其相続人ニ属セス

第二百七十二条　抵当債権者ヲ参加セシメタル総テノ公売ニ付テハ滌除ヲ為スノ限ニ在ラス

公用徴収ニ付テモ亦同シ

右ハ抵当債権者ノ其順位ヲ以テ競落代価又ハ徴収償金ノ配当ニ加入スルノ権利ヲ妨ケス

第二百七十三条　使用権、住居権及ヒ地役権ハ滌除ヲ為スノ限ニ在ラス債務者抵当不動産ニ此等ノ権利ヲ負担セシメタルトキハ抵当債権者ハ其権利ヲ斟酌セスシテ債務者ニ対シ不動産ノ売却ヲ訴追スルコトヲ得

債務者ノ第二百六十二条第二項ニ記載シタル制限ヲ超エテ為シタル賃貸借ニ付テモ亦同シ

第二百七十四条　第三所持者ハ債権者ヨリ訴追ヲ受ケサル間ハ何時ニテモ滌除スルコトヲ得又弁済スルヤ不動産ヲ委棄スルヤノ催告ヲ受ケタル後一个月内ニ滌除スルコトヲ得但此ニ違フトキハ其権ヲ失フ

然レトモ右ノ失権ハ当然生セス裁判所ニ之ヲ請求スルコトヲ要ス但裁判所ハ第三所持者カ正当ノ障碍アリシコトヲ証シ且債権者ノ其遅延ノ為メニ現実ノ損害ヲ受ケサル可キニ於テハ失権ヲ宣告セサルコトヲ得

又債権者ヨリ第二百七十九条第二号ニ規定シタル一个月ノ期間ニ失権ヲ請求セサルニ於テハ失権ヲ宣告スルコトヲ得ス

第二百七十五条　第三所持者ハ滌除ノ準備トシテ自己ノ権利ヲ公示シ且第百八十四条及ヒ第百八十五条ニ従ヒ譲渡人ノ先取特権ヲ公示スル為メ自己ノ取得証書ヲ登記スルコトヲ要ス

右ノ後第三所持者ハ其不動産ノ負担セル先取特権又ハ抵当ノ目録ヲ登記官吏ニ要求ス

第二百七十六条　上ニ記載シタル一个月ノ期間ニ第三所持者ハ記入シタル各債権者ト第百二十三条、第百八十三条及ヒ第百八十四条ニ従ヒ登記カ記入ニ同シキ効力ヲ有スル債権者トニ左ノ諸件ヲ告知スルコトヲ要ス

第一　取得証書ノ旨趣、其日附及ヒ登記ノ日附、譲渡人及ヒ取得者ノ氏名、職業、住所、譲受ケタル不動産ノ性質、其所在地、譲渡ノ代価及ヒ其負担ヲ指示スル要領書但交換、贈与若クハ遺贈ニ因リテ権利ヲ取得シタルトキハ其評価ヲ指示ス可シ

第二　各記入ノ日附、其帳簿ノ葉数、其債権者ノ氏名、住所及ヒ主タル債権トシテ記入シタル金額ヲ明示スル記入表

第三　第三所持者ハ右ノ債権者カ法律ニ従ヒ且一个月ノ期間ニ増価競売ヲ求メサルニ於テハ満期、未満期又ハ条件附ノ債権ヲ区別セスシテ各債権者ノ記入ノ順序ニ従ヒ之ニ不動産ノ代価、其評価若クハ之ニ超ユル金額ノ弁済又ハ其債権者ノ為メニ金額ノ供託ヲ為サントスルノ提供

第二百七十七条　記入シタル債権者ノ中ニ先取特権ヲ有スル譲渡人又ハ分割者アルトキハ前条第三号ニ定メタル提供ニハ此債権者ヲシテ同一ノ期間ニ其解除訴権ヲ行ハント欲スル旨ヲ述ヘシムル為メノ催告ヲ添フルコトヲ要ス但第百八十六条及ヒ第百八十七条ノ明文ニ因リ法律上ノ抵当ニ変性シタル先取特権ヲ有スル者ニ付テモ亦同シ

第二百七十八条　譲渡証書中ニ抵当ト為シ又ハ為ササル財産アルトキハ取得者ハ抵当財産ノ為メニノミ提供ヲ為スコトヲ得又増価競売ハ此提供ニ基キ之ヲ為スコトヲ要ス

第二百七十九条　凡ソ記入シタル債権者ニシテ上ニ定メタル提供ヲ受諾セサル者ハ左ノ方式、期間及ヒ条件ヲ以テ抵当財産ノ競売ヲ要求スルコトヲ要ス

第一　其要求ニハ提供金額ノ上少ナクトモ十分一ノ増価ニテ買受クルコトト其増額シタル代価ノ全部及ヒ費用ノ為メ十分ナル保証人又ハ担保ヲ供スル旨ノ陳述トヲ添フルコトヲ要ス若シ此ニ違フトキハ其要求ハ無効タリ但此場合ニ於テハ総テノ正本ニ要求者又ハ其特別代理人ノ署名アルコトヲ要ス

第二　右ノ要求ハ提供告知ヨリ一个月内ニ第三所持者ニ之ヲ送達スルコトヲ要ス若シ此ニ違フトキハ其要求ハ亦無効タリ

第三　右ノ期間ニ於テ債務者タルト否トヲ問ハス前所有者ニ右ニ同シキ送達ヲ為スコトヲ要ス

第四　主タル債務者ニ非サル者カ抵当ヲ設定シタルトキ

モ亦同一ノ期間ニ於テ其債務者ニ送達ヲ為スコトヲ要ス

第二百八十条　〔略。成案二六六条と同一〕

第二百八十一条　定マリタル方式及ヒ期間ヲ以テ増価競売ノ告知アリタルトキハ其競売ノ要求者ハ他ノ記入シタル債権者ノ承諾ナクシテ競売ヲ言消スコトヲ得ス其債権者ハ此増価競売ノ実行ヲ要求スルコトヲ得

若シ競売ノ実行アリタルトキハ第二百九十二条以下ヲ適用ス

第二百八十二条　債権者ノ何人ヨリモ有効ニ競売ヲ求メサリシトキハ不動産ノ滌除ハ債権者間ノ熟議上若クハ裁判上ノ順序ヲ以テスル弁済ニ因リ又ハ債権者ノ名ヲ以テスル供託ニ因リテ成ル但此供託ニ付テハ予メ実物提供ヲ為スコトヲ要セス

此場合ニ於テ総テノ抵当ハ之ヲ抹殺ス其元資ノ不足シタルモノト雖モ亦同シ

第二百八十三条　〔略。成案二六九条と同一〕

第三款　財産検索ノ抗弁

第二百八十四条　自身ニテ且主トシテ抵当債務ノ責ニ任セサル第三所持者ハ訴追債権者ニ対シ同一債務ノ為メニ抵当ト為リタル他ノ不動産ヲ予メ検索シテ之ヲ売却セシメント求ムルコトヲ得但此カ為メニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　其不動産カ弁済ノ有ル可キ場所ノ控訴院ノ管轄内ニ在ルコト

第二　其不動産カ猶ホ主タル債務者ニ属スルコト

第三　其不動産カ争ニ係ラサルコト

第四　其不動産カ債権者ノ記入ノ順位ト其価額トヲ斟酌シテ之ニ全部ノ弁済ヲ得セシムルニ不十分ナルノ明白ナラサルコト

右ノ抗弁ハ訴追ノ起初ニ之ヲ提出スルコトヲ要ス

第二百八十五条　〔略。成案二七一条と同一〕

第二百八十六条　他人ノ債務ノ為メ自己ノ不動産ヲ抵当ト為シタル者及ヒ其相続人ハ検索ノ抗弁ヲ以テ対抗スルコトヲ得

主タル債務者ノ連合債務者又ハ相続人ノ中ニテ訴追前ニ債務ニ於ケル自己ノ部分ヲ弁済シタル者ニ付テモ亦同シ

第四款　委棄

第二百八十七条　〔略。成案二七三条と同一〕

第二百八十八条　主タル債務者又ハ保証人トシテ自身ニ債務ヲ負担シタルモノニ非サル第三所持者ノミ委棄ヲ為スコトヲ得

債務者ノ連合債務者又ハ相続人ノ中ニテ債務ニ於ケル自己ノ部分ヲ弁済シタル者及ヒ供物保証人ハ訴追中ト雖モ委棄

ヲ為スコトヲ得

第二百八十九条　有効ニ委棄ヲ為スニハ自身ナルト代人ノ資格ナルトヲ問ハス所有権徴収ノ訴追ニ被告トシテ出頭スルノ能力ヲ有スルヲ以テ足レリトス

第二百九十条　委棄ハ委棄者又ハ其部理代人抵当財産所在地ノ裁判所ノ書記局ニ於テ之ヲ陳述シ其陳述書ニ署名シテ訴追債権者ニ告知スルコトヲ要ス

裁判所ハ訴追債権者又ハ第三所持者其他ノ利害関係人ノ求ニ因リテ委棄ニ付テノ管財人ヲ選任ス但所有権徴収ノ訴追ハ此管財人ニ対シテ継続ス

第二百九十一条　〔略。成案二七七条と同一〕

第五款　競売及ヒ所有権徴収

第二百九十二条　第三所持者カ弁済ヲ為サス委棄ヲ為サス又滌除ヲ提出セサルトキ又ハ滌除ノ目的ニテ為シタル提供ノ受諾ヲ得サルニ因リテ増価競売ノ求アリタルトキハ民事訴訟法ニ規定シタル方式ト公示トヲ以テ不動産ヲ競売ニ付ス。

第二百九十三条　譲渡人又ハ分割者カ第二百八十条ノ明文ニ従ヒ其先取特権又ハ法律上ノ抵当権ヲ閣キテ其解除訴権ヲ行ハント欲スル旨ヲ陳述シタルトキハ競売前ニ其訴ヲ為スコトヲ要ス但第三所持者ノ要求ニ因リテ裁判所カ此事ニ付キ定メタル期間ヲ超ユルコトヲ得ス

第二百九十四条　総テノ場合ニ於テ解除ノ請求ナク又ハ其認許ナキトキハ第三所持者ハ競売ノ際競買人ト為ルコトヲ得

第三所持者ノ利益ニ於テ競落ヲ宣告シタルトキハ其判決ハ原証書確認ノ証書トシテ其原証書ノ登記ノ縁辺ニ之ヲ附記スルノミ

第二百九十五条　第三所持者ニ非サル者ノ利益ニ於テ競落ヲ宣告シタルトキハ其判決ハ所有権移転ノ証書トシテ特ニ之ヲ登記シ且前登記ノ縁辺ニ之ヲ附記ス

第二百九十六条　前条ノ場合ニ於テハ競落ノ不動産ト第三所持者ニ属スル他ノ不動産トノ間ニ成立セシ地役権ハ一旦混同シタルモ働方及ヒ受方ニテ再生シ其混同ハ解除セラル

第三所持者ニ其取得前ヨリ属セシ用益権、賃借権其他ノ所有権ノ支分ニ付テモ亦同シ

第二百九十七条　競落ノ孰レノ場合ニ於テモ第三所持者カ競落ノ不動産ニ付キ記入シタル抵当ヲ有セシトキハ其順位ニテ配当ニ加入ス

第二百九十八条　各債権者ニ其記入ノ順序ニ従ヒテ競落代価ヲ弁済シ尚ホ剰余アルトキハ其剰余ハ競落人タルト否トヲ問ハス第三所持者ニ属ス

若シ競落前ニ第三所持者ノ債権者カ右ノ不動産ニ付キ抵当ノ記入ヲ為シタルトキハ其債権者ハ前所有者ニ対シテ記入シタル債権者ニ次キ配当ニ加入ス

第二百九十九条　〔略。成案二八五条と同一〕

第三百条　第三所持者ハ委棄スルヤ弁済スルヤノ催告ヲ受ケタル後ニ非サレハ債権者ニ対シテ果実ノ計算ヲ為スコトヲ要セス

第三百一条　如何ナル場合ニ於テモ競落代価ノ弁済又ハ其供託ノ後ハ記入シタル総抵当ハ之ヲ抹殺シ不動産ハ滌除セラル其元資ノ不足シタル抵当モ亦同シ

第三百二条　競落ノ後第三所持者ハ左ノ如ク譲渡人ニ対シテ担保ノ求償権ヲ有ス

第三所持者カ競落人ト為リタルトキハ第二百八十三条ニ記載シタル如ク賠償ヲ受ク

外人ノ利益ニ於テ競落ノ宣告アリタルトキハ第三所持者ハ普通法ニ依リテ追奪担保ニ付テノ権利ヲ有ス但左ノ区別ニ従フ

第一　売買其他ノ有償名義ノ取得ノ場合ニ於テ競落代価カ取得ノ原代価又ハ対価ヲ超過シタルトキハ此差額ハ

第三所持者カ権利ヲ有スル損害賠償中ニ増価トシテ之ヲ加フ

第二　贈与又ハ遺贈ノ場合ニ於テハ第三所持者ハ競落カ贈与者若クハ遺言者又ハ其相続人ヲシテ抵当債務ヲ免カレシメタル限度ニ非サレハ贈与者若クハ遺言者又ハ其相続人ヨリ賠償ヲ受ケス

手続ノ費用ハ競落人ヨリ之ヲ第三所持者ニ弁償ス

## 第六節　登記官吏ノ責任

第三百三条　第二百二十八条ニ定メタル受取証ニ付キ記載シタルモノノ外登記并ニ記入ノ帳簿ノ数、性質、記載ノ方法及ヒ登記官吏ノ職務ニ違ヒタル場合ニ於テ言渡サル可キ罰金ハ特別ノ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第三百四条　登記官吏ノ民事上ノ責任ニ関スル財産編第三百五十五条ハ抵当記入ノ脱漏又ハ訛誤ニ之ヲ適用ス

第三百五条　登記官吏カ第三所持者ノ証書登記ノ後之ニ交付シタル認証書中一箇又ハ数箇ノ記入ヲ脱漏シ此脱漏ノ為メ記入債権者カ滌除ノ提供又ハ競落ノ手続ニ加ハラサリシトキト雖モ猶ホ不動産ノ抵当ハ滌除セラル

第三百六条　滌除ノ提供ニ対スル増価競売ノ為メ第二百八十条ニ定メタル時期ノ満了セサル間ハ脱漏セラレタル債権者ハ其脱漏ヲ第三所持者ニ告知シ之ニ提供ノ通示ヲ求メ増価競売ヲ要求シ又所有権徴収ノ手続カ終了セサルトキハ之ニ加ハルコトヲ得然レトモ此カ為メ其手続ヲ遅延スルコトヲ得ス

如何ナル場合ニ於テモ右ノ債権者ハ熟議上又ハ裁判上ニテ発開シタル順序配当手続ノ閉鎖セサル間ハ之ニ加ハルコトヲ得

右ハ前記ノ債権者カ脱漏ニ因リテ損害ヲ受ケタルコトヲ疎明スルニ於テハ登記官吏ニ対スル求償権ヲ妨ケス

登記官吏ハ主タル債務者又ハ其保証人ノ免責ノ為メ右ノ求償ニ因リテ弁済シタルモノニ付キ之ニ対シテ求償権ヲ有ス

第三百七条　登記官吏ハ登記、記入又ハ縁辺附記ノ要求ヲ拒ムコトヲ得ス但其要求カ合法ナラサルトキ又ハ法律ノ要スル疎明書類ニ録製費用其他登記官吏ノ収受ス可キ費用ヲ添ヘテ差出ササルトキハ此限ニ在ラス

拒絶ノ場合ニ於テ登記官吏ハ要求ヲ受ケタルコトヲ認ムル書面ニ之ヲ拒絶シタル理由ヲ記載シテ交付ス可シ

右書類ノ交付アリタル上ハ利害関係人ハ其地ノ裁判所ニ抗告スルコトヲ得

## 第七節　抵当ノ消滅

第三百八条　抵当ハ左ノ諸件ニ因リテ消滅ス

第一　主タル義務全部ノ確定ノ消滅但更改ノ場合ニ付キ財産編第五百三条ニ記載シタルモノヲ妨ケス

第二　債権者ノ抵当ノ抛棄

第三　時効

第四　滌除但債権者提供ヲ受諾シ且第二百八十二条ニ従ヒテ提供金額ノ弁済又ハ供託アリタルトキ

第五　競落但第二百七十二条及ヒ第三百一条ニ従ヒテ競落代価ノ弁済又ハ供託アリタルトキ

第六　抵当不動産ノ全部ノ滅失但第二百七条ニ従ヒテ債権者ノ権利カ其滅失ヨリ生ス可キ賠償ニ移転スルコトヲ妨ケス

第七　公用徴収但抵当債権者ニ其償金ヲ弁済スルコトヲ妨ケス

第三百九条　義務ノ消滅カ裁判上ニテ認メラレタル原因ニ由リテ取消サレタルトキハ記入ヲ抹殺シタリト雖モ抵当ハ其原順位ニ復ス

然レトモ其抵当ハ抹殺ノ後新記入ヲ為ス前又ハ記入ヲ復シタル判決ヲ原記入ノ縁辺ニ附記スル前ニ記入ヲ為シタル債権者ヲ害スルコトヲ得ス

第三百十条　抵当ノ抛棄ハ場合ニ従ヒ有償又ハ無償ノ名義ニテ債権ヲ処分スルノ能力ヲ有スル債権者ニ非サレハ之ヲ為スコトヲ得ス

債権者其抵当順位ノミノ抛棄ヲ為ストキモ亦同シ

抵当又ハ順位ノ抛棄ハ黙示タルコトヲ得

債権者カ譲渡人ト共ニ抵当不動産ノ譲渡ニ参加シタルトキハ其参加カ法律上或ル特別ノ名義ニテ要セラレサル場合ニ限リ追及権ノミニ関シテ其抵当ヲ抛棄シタリト看做サル

第三百十一条　〔略。成案二九五条と同一〕

第三百十二条　抵当不動産ノ所有者タル債務者カ其不動産ヲ譲渡シテ取得者又ハ其承継人カ之ヲ占有スルトキハ記入シタル抵当ハ抵当上ノ訴訟ヨリ生スル妨碍ナキニ於テハ取得者カ其証書ヲ登記シタル日ヨリ起算シ三十个年ノ時効ニ因

リテノミ消滅ス但債権カ免責時効ニ因リテ其前ニ消滅ス可キ場合ヲ妨ケス

第三百十三条　真ノ所有者ニ非サル者カ不動産ヲ譲渡シタルトキハ占有者ハ其善意ナルト悪意ナルトニ従ヒ所有者ニ対シテ時効ヲ得ル為メニ必要ナル時間ノ経過ニ因リ記入シタル抵当債権者ニ対シテ時効ヲ取得ス

無名義ニテ不動産ヲ占有スル者ニ付テモ亦同シ

第三百十四条　第三所持者ノ為メノ抵当消滅ノ時効ハ記入ノ更新ニ因リテ中断セラレス然レトモ其時効ハ占有者ノ任意ノ追認及ヒ第二百七十四条ニ規定シタル如ク其占有者ニ為シタル催告其他総テ抵当権ニ効力ヲ与フル行為ニ因リテノミ中断セラル

右ノ時効ハ債権ニ附着スル期限又ハ条件ニ因リテ停止セラレス

## 五　その他

### 二七　立法資料　民法訳漢文稿（II）〔編・部・巻等の用法について〕[1]

リーヴル（編）　一部ノ書物ヲ大別シテ其題目ニ附スル称ナリ例ヘハ第一編第二編ト云フカ如

ハルチー（部）　キ是ナリ

チートル（巻）　一編ノ中ヲ幾部分ニモ区別シテ之ニ附スルノ称ナリ例ヘハ第一編第一部ト云ヘル如キ是ナリ

シャピートル（章）　是亦一編中ノ小別ナリ今日本民法草案ニハ此語ヲ用ヰズ仏蘭西民法ニハ此語ヲ編ノ次ニ用ユ

セクション（款）　巻若クハ部ヲ区分スル為メニ用ユル称ナリ今日本民法草案ニハ部ノ次ニ章ヲ置ク又仏民法ニハ巻ノ次ニ之ヲ置ク

パラグラーフ（節）　章ヲ区別スルノ称ナリ日本民法草案中一例ヲ挙クレハ第二章中ニ四款ヲ置ク如キ是ナリ

アルチクル（条）　款ヲ区別スルノ称ナリ今仏民法ヲ以テ例センニ第三編第三巻第四章第一款ノ中ニ三節アルカ如キ是ナリ

数箇ノ規則若クハ事柄ヲ列記スルニ当リ之ヲシテ簡明ナラシメンガ為メ其一件ノ毎ノ首ニ附スルノ称号ナリ而シテ以上六種ノ称号ト互ニ相関係スルモノニ非ス何トナレハ編ノ中ニモ条アリ部ノ中ニモ条アリ巻ノ中ニモ条アリ其他

章款節共ニ条アレハナリ且此条ハ編若クハ巻ノ改マル毎ニ一変スルモノニ非ス初メヨリ号ヲ追テ附スルヲ得可シ今仏国民法ヲ以テ証センニ同法ハ全部ヲ三篇ニ分ツ而モ其条ハ篇ノ改マルニ係ハラス第一条ヨリ追フテ第二千二百八十一条ニ至ルカ如キ是ナリ

アリネアー（項）

条ノ中ニ項アリ今日本民法草案第六条ヲ以テ例センニ同条ニ「物ニ有体アリ無体アリ」ト記ス是第一項ナリ夫レヨリ更ニ端ヲ改メテ有体トハ云々ト記ス是第二項ナリ

ニュメロ（号）

項中ニ「ニュメロ」アリ例ヘハ草案第六条ノ三項中ニ四個ノ「ニュメロ」（第一第二第三第四ト云ヘルモノ）アル如キ是ナリ

（略）

［民法編纂局用箋（一三行罫紙）使用、手書きの文書。「他ヲ他ヲ債主権（第十条七丁ウ六行）／何レヲ　何レヲ人ノ建造ニ係ルト（第八条五丁オ末行）」など、三七項目を例示。作成の意図・時期・起案者等は不明。**資料一〇**（一六号三一九頁）とともに綴じ込まれている。］

**二九　立法資料　明治十三年　民法編纂局書類（V）〔民法編纂局章程〕**（略）

［司法省用箋（一〇行罫紙）使用、手書きの文書。起案者・作成時期等は不明。「民法編纂局章程」（明治一三年五月）の草案とみられる。向井健「新たなる民法人事編草案――明治十二年草案と、その周辺――」法学研究五八巻七号一八頁以下（昭和六〇年）に全文が収録されている。**資料四**（一五号三二六頁）とともに綴じ込まれている。］

**三〇　立法資料　民法訳漢文稿（III）〔ボアソナードの書簡〕**[1]

暮鴉村南啞渡氏書柬ノ訳

余ハ民法草案第一冊ヲ再閲シ畢リテ将ニ一ノ「アペセ」（ターブルアルハベチック）順ノ索引表ヲ作ラントス而シテ余ハ其第二冊及ヒ第三冊ノ為メニモ齊シク之ヲ作ランコトヲ欲スルナリ

余之ヲ作ルニ際リテ啻ニ印刷ノ誤謬ヲ発見スルノミナラスシ

注（1）**資料一四**（一八号四二七頁）中にある文書である。表題はついていない。司法省用箋（一〇行罫紙）使用、手書き。作成時期・起案者等は不明。

**二八　立法史資料　民法編纂局書類（II）〔ヲ字ヲ加フル例〕**

テ同時ニ其基本ニ関スル改正ヲモ亦更ラニ発見スルナラン
此機会ニ際リテ余ハ自ラニ安セサルモノ在テ存スルナリ
抑々第一冊ノ正条ハ即チ可ナリト雖トモ註解ハ太タ短ナリ短ニ過クルナリ（足下ハ当時余カ幾ント陰密ニ之ヲ作リタルコトヲ知ル可シ）次キニ又其第一冊ニ於テハ伊太利亜法典ノ引用ナシ蓋シ余ハ水利ノ（地役）ノ部ヨリシテ始メテ該法典ヲ参観シタリ而シテ其参観ヲ茲ニ始メタルハ其以前未タ該法典ヲ有セサリシニ因ルモノナリ
爾来余ハ其以前ノ事項中専パラ夫ノ占有及ヒ賃貸ニ就テハ少クモ其註解中之レニ有益ナル参照ノ為ス可キモノアルコトヲ発見セリ
蓋シ貴国創定民法ノ特ニ仏蘭西法典ニ而已倣フニ過キタルノ観ナキ時ハ（足下ハ既ニ其一箇条ト雖トモ（仏ノ法ヲ）変更セサルモノナキヲ知ル）貴国ノ外国交際ノ為ニモ可ナルヘシ
以上述フル所ノモノハ余ヲシテ最初ノ二冊ヲ増補シ且ツ冊尾ニ正誤ヲ付シタルモ未タ其解読ノ為メ甚タシキ困難ヲ見ルヲ免レサラシムル所ノ大誤謬ヲ正シテ以テ之ヲ再板スルノ甚タ美事タルコトヲ思惟セシムルナリ（足下ハ此誤謬ノ余ニ原由セサルコトヲ知ラン何トナレハ其第一冊ノ如キハ人其余カ之ヲ校閲スルコトヲ欲セス而シテ余カ其第二冊ヲ校閲シタルハ隠密以テ之ヲ為シタルモノナレハナリ）
若シ其第一冊第二冊ヲ再校スルトキハ之ヲ一巻（物権）ト為シ而シテ第二冊ノ義務篇（人権）ハ之ニ合巻ス可シ然カスルトキハ現今印刷ニ付スル所ノ治罪法ノ如ク重大ノ改良ヲ加ヘ略題ヲ付シ欄外（マルジット）又右ノ略題ヲ記シ一節毎ニ註解ス可シ
右云フ所ノ如クシテ又善良ナル「アベセ」順ノ索引表ヲ作ル可シ而シテ之レカ千部ヲ印刷スルトキハ又其費用ヲ償フニ至ルヘシ
余ハ其第一冊ヲ補充スルカ為メ一ケ月第二冊ノ為メニ十五日即チ右二冊ノ為メ多クモ二ケ月ノ時日ヲ以テ足ラント考量ス
蓋シ其植字者ニ於テハ一層ノ時日ヲ要ス可シト雖トモ而カモ既ニ印書ノ正条ヲ有スレハ是又更ラニ迅速ナル可キナリ
右ノ考案ニ於テハ其同冊数ヲ有スルカ為メ第三冊ヲモ又再板ス可キナリ
右印刷ノ時間ハ日本ノ翻訳文ヲ再校シ之ヲ日本語ト為ス可シ（訳者曰ク日本語ト為ストハ直訳ヲ改ムルノ意ナラン）又編纂局ハ其全部ヲ復読ス可キナリ何トナレハ該局ハ日本ニ於テ斯ク新ニシテ且何レノ国ニ於テモ至難タル事件ヲ充分ニ了解スルカ為メニハ其進ムノ太タ迅速ニ過クルカ故ナリ
以上述フル所ヲ以テ編纂局総裁閣下ト商議シ而シテ若シ其表ト正誤ヲ作ルヲ要セハ請フ之ヲ余ニ告ケヨ何トナレハ此等ノモノタル若シ之ヲ再板スルトナラハ無益ナリ若シ又既ニ成ル所ノモノヲ保存ストナラハ必要ナレハナリ　敬白

ボアソナード

千八百八十二年二月二十八日　花押

磯部君

注(1)　司法編纂局用箋（一〇号罫紙）使用、手書きの文書。訳者は不明。**資料一四**（一八号四二七頁）中に綴じ込まれている。前半と後半（＊印以下）が別の資料（二丁）を挟み前後して綴じ込まれているが、連続するものとして採録した。

**三一　立法資料　明治十三年　民法編纂局書類（VI）〔ボアソナード『日本民法草按講義』出版広告の取扱いについて〕(1)**

＊警一六五(2)

出板之義ニ付(3)伺

当府下東区南本町四丁目拾六番地書肆梶田喜蔵ナルモノポア(ママ)ソナード氏起稿日本民法草按講義出板広告之儀ハ不都合ノ旨ヲ以テ処分方内務省ヘ御照会相成候趣曾テ書記官ヨリ通知有之就テハ爾后内務卿ヨリ何分ノ達可有之義ト存居候中客年十二月廿八日付ヲ以該書ノ義ハ御省事務上参考ノ為メ印刷セラレ候モノニシテ人民ニ於テ猥リニ広告出板スヘキモノニ無之ニ付当庁ニ於テ取調ノ上差止メ方云々致敬承候就テハ其旨速ニ本人ヘ可相達処該広告タルヤ出板条例ノ範囲内ニ在リトスルカ内務卿ノ命令アルニ非レハ禁止ノ処分ニ至リ難ク又条例ノ範囲外トスルカ他ニ之ヲ差止ムヘキ成規無之然ラハ仮令本人ヘ之ヲ達スルモ到底其差止ヲ肯ンセサルヘシ然ルトキハ何ノ条規ニ依テ之カ処分ヲ施スヘキヤ結局ノ処分方相伺候上達方取計度候条至急御指揮有之度候也

明治十七年一月十二日　大坂府知事　建野郷三

司法卿　山田顕義殿

＊明治十六年十二月廿四日甲第百一四号(4)

卿(5)　第六局長(6)

輔　同局属(7)

本月三日内務卿ヘ御照会之末別紙ノ通回答有之候ニ付大坂府ヘ左之通御照会相成置候方可然哉左ニ取調仰高裁候也

六二六二号(2)

其府下東区南本町四丁目心斎橋筋拾六番地書肆梶田喜蔵ナル者ボアソナード氏起稿日本民法草案講義出版広告云々ノ義ニ付本月三日付ヲ以書記官ヨリ及通知候通該書ノ義ハ当省事務上参考ノ為メ印刷候モノニテ猥リニ広告シテ人民ノ出版為ス可キ者ニ無之間其庁ニ於テ取調ノ上差止メ有之候様致度此段及照会候也

明治十六年十二月廿八日[8]　　司法卿　山田顯義

大坂府知事　建野郷三殿

*司図第一四七号[2]

大阪府下東区南本町四丁目心斎橋筋拾六番地梶田喜蔵ナル者ボアソナード氏起稿日本民法草案講義云々ノ儀ニ付御照会之趣致承知候然処右民法草按講義外一書共未タ当省ヘ出版届出サルモノニ有之果シテ無届ニテ出版ノ儀御発見相成候ハハ御省ニ於テ告発ノ手続相成可然将又御照会ニ拠レハ民法草按講義之儀貴省ニ於テ已ニ御出版相成候趣之処右ハ何年月日出版之儀当省ヘ御届相成候哉承知致度此段御回答旁申進候也

明治十六年十二月十九日　　内務卿　山縣有朋

司法卿　山田顯義殿

追而御追伸中指令類襍云々ハ予約広告ノ例ニ挙タルニ止ルノミノ事ニ被存候得ハ当省ニ於テ別段取調ニ及フ間敷被存候也

*明治十六年十一月廿九日甲第百号[9]

卿[10]　　第六局長[6]

輔[11]　　同局属[7]

京都始審裁判所宮津支庁ヨリ別紙広告書差越候ニ付一覧候処日本民法草按講義出版云々掲載有之右ハ未タ公然人民ノ出版スヘキ書物ニモ無之甚タ不都合ニ付内務省ヘ左案ノ通御照会相成就テハ大坂府ヱモ通知及ヒ置候方可然哉左ニ取調併テ仰高裁候也

但シ別紙広告中指令類襍ノ義ハ過般内務省ヘ御照会ノ末同省ヨリ発売差止候書籍ニ被認候ニ付此段御照会書ヘ申添候也

五五〇一号[2]

内務省ヘ御照会案

大阪府下東区南本町四丁目心斎橋筋拾六番地書肆梶田喜蔵ナル者ボアソナード氏起稿日本民法草按講義出版云々別紙ノ通及広告已ニ第一回ハ出版シタル者ト相見ヘ第二回ニ於テハ九月十五日ヲ限ルト有之抑該書ノ義ハ当省ニ於テ事務上参考ノ為メ印刷候迄ニテ未タ人民ノ公然出版スヘキ書物ニ無之然ルニ前記ノ通広告出版候義如何ニモ不都合ニ付貴省ニテ御取調ノ上断然御差止メ相成度此段及御照会候也

明治十六年十二月三日[8]　　司法卿　大木喬任

内務卿　山田顯義殿

追伸本文別紙広告中指令類襍ト題セシ書籍有之該書ハ本年六月十六日付ヲ以貴省ヘ及御照会候末同月廿六日付ニテ発売差止云々御回答有之候書籍ニハ無之候哉果メ然ラハ是亦不都合ニ付一応御取調相成度候也

五五〇二号(2)

大坂府ヘ通知按

其府下東区南本町四丁目心斎橋筋拾六番地書肆梶田喜蔵ナル者ボアソナード氏起稿日本民法草按講義出版云々及広告候段甚タ以不都合之儀ニ付別紙写ノ通内務省ヘ照会相成候間貴庁ニ於テモ其旨御心得有之度長官ノ命ニ依リ此段及御通知候也

明治十六年十二月三日(8)　司法少書記官　木村正辞

大坂府知事　建野郷三殿

*予テ当省ニ於テ事務上参考ノ為メ印刷ニ及候日本民法草案講義其府東区南本町四丁目拾六番地書肆梶田喜蔵ナルモノ無期同盟員募集広告ト題シ別紙広告書ヲ世上ニ散布シ予約出版致シ候趣ニ付内務省ヘ及問合候処未タ無届ナル旨回答ニ付果メ出版候上ハ出版条例第一条同改正罰則第一条第五条中新聞紙条例第三十一条ニ抵触候者ニ付其局ニ於テ探偵ノ上犯則ト見認候上ハ処分方可取斗候此段及内達候也

明治十七年一月　司法卿　山田顕義

大阪始審裁判所詰

検事　別府景通殿　親展

追テ当省ノ版権所有ニ係ル民刑事問題并答案ヲ同人ニ於テ予約印刷ノ旨別紙ノ通リ同盟員ヘ広告及ヒ候其落成期限ニ依レハ近々出版候モノト被推考候就テハ愈々出版ヲ為シタル上ハ是亦本文同様可取斗候也

**注**(1)　「出板之義ニ付伺」は大阪府用箋、その他は司法省用箋（いずれも一三行罫紙）使用、手書きの文書。＊印ごとに用紙を別にし、書体も異なっている。なお、**資料四**注（1）（一五号三二六頁）参照。

(2)　朱字。後日の書込みのようである。

(3)　欄外に「司法省第壱号」の押印がある。

(4)　欄外枠に「第一九六号」の記入がある。また、上部に「参照」との付箋がついている。

(5)　「顕義」の押印がある。

(6)　「木村」の押印がある。

(7)　「河村」の押印がある。

(8)　この下に「犬塚」との押印ふうの書込みがある。

(9) 欄外枠に「第一七四号」の記入がある。
(10) 「大木」の押印がある。
(11) 「河瀬」の押印がある。

## 三二　法典実施延期意見（略）

［次の各文書（いずれも活版印刷）を綴じ合わせた資料。このうち①②⑦は、星野通『明治民法編纂史研究』（昭和一八年ダイヤモンド社）、および同『民法典論争資料集』（昭和四四年　日本評論社）に収録されている。

① 「法典実施延期意見」
江木衷等一一名の実施延期意見書。明治二五年四月一四日出版、非売品。

② 「読法典実施断行意見書」
実施断行意見批判（起案者不明）。明治二五年五月二〇日出版、法学新報号外。

③ 「法典断行意見」
東京府下代言人有志者（岡野寛等九四名）の実施断行意見書。明治二五年六月一日出版、法治協会雑誌号外。

④ 「弁妄」
実施断行意見書（起案者不明。未完）。明治二五年五月一二日発行、法治協会雑誌号外。

⑤ 「法典実施断行意見」
実施断行意見書（起案者不明。一部欠）。明治二五年五月一四日出版、法律政治講義録号外。

⑥ 「法典実施断行ノ意見」
岸本辰雄等八名の実施断行意見書。明治二五年五月一一日出版。発行所（明法堂）から推測すると法治協会雑誌号外か明法誌叢号外のようであるが、確認はできない。福島正夫編『穂積陳重博士と明治・大正期の立法事業』（昭和四二年　民法成立過程研究会。同編『穂積陳重立法関係文書の研究』（平成元年　信山社）所収）五〇頁は、法治協会雑誌号外としている。

⑦ 「法典ノ実施ニ関スル明法会ノ意見」
梅謙次郎等六二名の実施断行意見書。明治二五年五月二三日出版、明法誌叢号外。］